

## [特別講演 I]

海軍省お雇い医師ウィリアム・アンダーソンが日本に残したもの  
——医学と美術史、そして……

彬子女王

京都産業大学日本文化研究所

嘉永6(1853)年、鎖国を続けていた日本にマシュー・ペリー(1794-1858)が米国艦隊を率いて浦賀に来航して以来、日本の歴史は大きな変革の時代を迎えることになる。明治になり、日本の近代化が進められていく中で、政府や民間企業、学校などは、欧米の優れた文化を取り入れるために、多くの外国人技術者を日本に招聘した。その分野は、政治、法制、軍事、金融、外交、建築、教育、美術など、多岐にわたっており、こうしたお雇い外国人たちが、惜しみなく自国の文化や技術、知識を提供してくれたことにより、日本の近代化は飛躍的に発展することになったのである。

本講演で取り上げるウィリアム・アンダーソン(1842-1900)は、ロンドンのセント・トマス病院に勤務していた医師であったが、1873年、明治政府の命により、帝国海軍医学校・海軍病院の解剖学と外科の教授として任命され、約6年間をお雇い外国人として日本で過ごすことになった人物である。アンダーソンが日本滞在中に行った脚気の研究や、西南戦争期のコレラ防疫運動など、日本の医学界における功績は大きく、学生の指導や患者の治療面でも高い評判を得ていた。

中でも、アンダーソンの弟子のひとりであった高木兼寛(1849-1920)は、アンダーソンの母校であるセント・トマス病院医学校にアンダーソンの推薦をもって入学し、帰国後は東京海軍病院長などを経て、明治18(1885)年には、海軍軍医総監に任ぜられた。ドイツ医学主流であった日本の医学界に、英国医学を導入した功績は大きく、東京慈恵会医科大学の前身となる成医会講習所を明治14(1881)年に創設、アンダーソンと共に行った脚気の研究を更に推し進め、海軍の食事を改良したことにより、脚気を撲滅したことも広く知られている。

また、アンダーソンが医師としての仕事の傍ら、情熱的に蒐集を行ったのが日本絵画であった。3000点にも及ぶコレクションは、英国に帰国後の1881年、大英博物館に売却されている。以降、このアンダーソン・コレクションは、大英博物館の日本美術コレクションの中心的役割を担うこととなり、今日に至っている。コレクション売却後も日本美術への興味を持ち続けた彼は、1886年、このコレクションを基に、2冊の日本美術の専門書を出版した。そのうちの1冊である *The Pictorial Arts of Japan* (『日本の絵画芸術』) は政府官僚の末松謙澄(1855-1920)によって邦訳され、明治29(1896)年に『日本美術全書』と改題され、日本で出版されている。

注目すべきことは、この書籍は日本美術の歴史を、西洋の科学的な分類法を用いて、古代から時代ごとに整理し、作家の紹介と詳細な註解をほどこした、日本においても、西洋においても初めての試みであるということである。日本美術の概念が確立していなかった当時の日本では、画論書や画人伝などはあっても日本美術全体について述べた書籍は存在しなかった。西洋人の身でありながら一から研究を進めなければならなかったアンダーソンの苦労は想像に難くない。結果として、『日本美術全書』は日本の美術史行政の分野で注目を浴び、日本政府が公式の日本美術史を構築とする礎となっていた。

本講演では、アンダーソンが明治期の日本医学界、そして日本美術界で果たした役割を明らかにしながら、日本、そして英国でアンダーソンの残した功績とは何であったのかを検討してみたい。